

2. つながりの変化

1) 支援者

次の災害が起こったときに、精神面・物質面・情報面で頼りにするのは、どのような人・組織(支援者)であろうか。本調査では、「災害が起こったとき、精神面であなたが頼りにできるのは誰ですか。以下に挙げられた24の支援者のうち、頼りになるものにはすべて○を、さらに、一番頼りになるものを1つ選んで◎をつけてください」という質問を、精神面・物質面・情報面のそれぞれについてたずねた。

回答者が○をつけたもの(複数回答(MA))は、「災害が起きたら、このような人・組織が/このような人・組織も頼りになるだろう」という個人の予想や一般的・世間的な期待をもとにして回答していることが考えられる。そして、◎をつけたもの(単一回答(SA))は、「災害が起きたら、実際はこの人・組織が私を助けてくれるだろう/この人・組織にこそ助けてもらいたい」という回答者の本音の部分が回答に表れていることが考えられる。複数回答と単一回答でどのように回答傾向が違うのかを見ることによって、どのような支援者をどのように頼りにしているのか、実際に頼りにできるのはどの支援者か(どのような人的・組織的資源を回答者が実際に持っているのか)を知ることができる。

A. 3つの側面における支援者

精神面の支援者として、配偶者に4割、子ども1割に支持が集まった

物質面の支援者として、ライフライン、配偶者、市役所、子どもの4つに支持が分かれた

情報面の支援者として、マスコミに4割、市役所2割に支持が集まった

図1～3が、3つの側面における支援者の支持率である。精神面を見ても(図1)、平均値(期待値)を超えた値をとった支援者は、複数回答では12支援者、単一回答では4支援者であった。複数回答では、配偶者(69.2%)、子ども(66.4%)の2つが6割を超え、以下、ライフライン、きょうだい、友人、医療機関、近所の人(ここまでが5割超)、親せき、両親、警察・消防、市役所、ボランティアと続いた。単一回答では、配偶者(41.5%)が全回答者の4割に支持され、以下、子ども(12.3%)、ライフライン(7.7%)、両親(7.6%)の4支援者のみが平均値を超えていた。

物質面では(図2)、平均値を超えた支援者は、複数回答12支援者、単一回答7支援者であった。複数回答では、ライフラインと市役所のみが過半数以上の支持を集めた。単一回答では、ライフライン(18.0%)、配偶者(13.9%)、市役所(10.7%)、子ども(9.5%)と支持が分かれたのが特徴的であった。情報面では(図3)、平均値を超えた支援者は、複数回答10支援者、単一回答3支援者であった。複数回答では、マスコミと市役所が7割以上の支持を集め、単一回答でも、マスコミ(41.1%)と市役所(19.6%)が全回答者の約6割に支持されていた。

以上をまとめると、精神面では、一般的にはたくさん頼れるものがあると考えているが、実際1つを選ぶとなると配偶者・子どもなど選ばれる支援者は限られていた。物質面の頼りは、一般的にはライフラインと市役所だと考える人が多かった。実際は、物質面の支援者は4傾向に分かれた。情報面は、マスコミと市役所が支援者として大きな期待を担っていた。

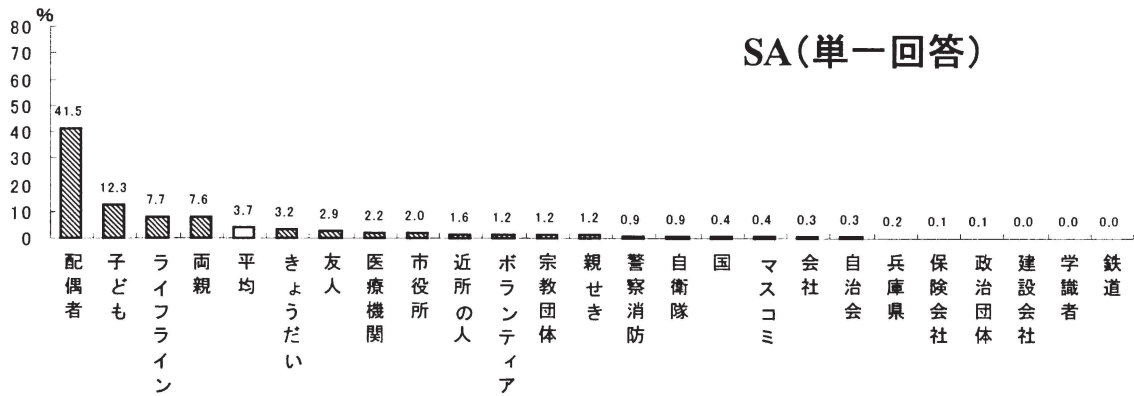
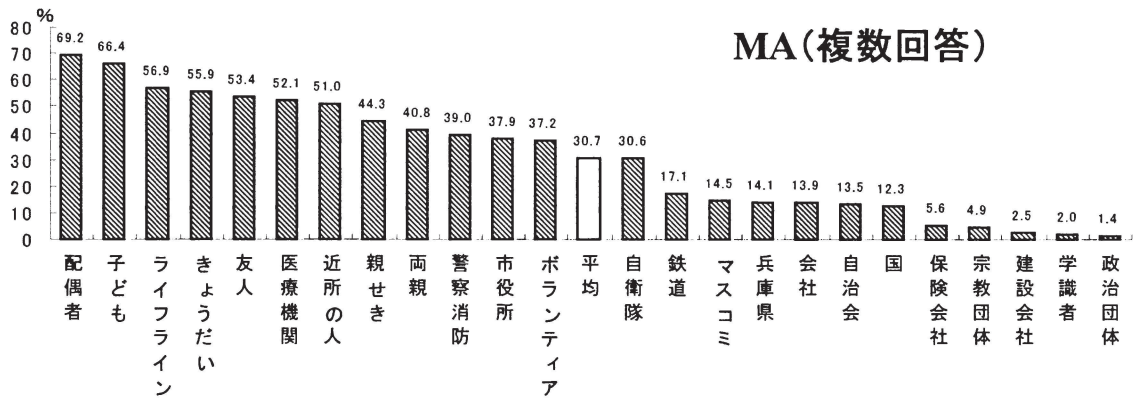


図1：次の災害における精神面での支援者

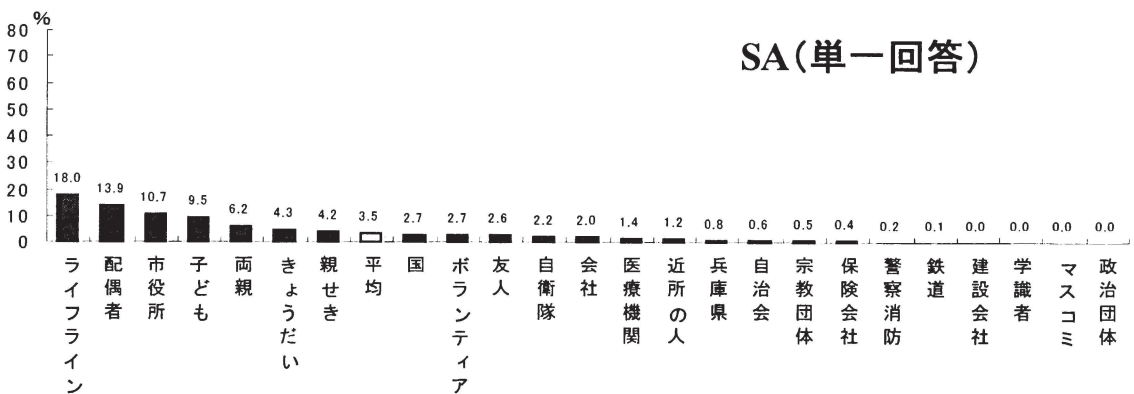
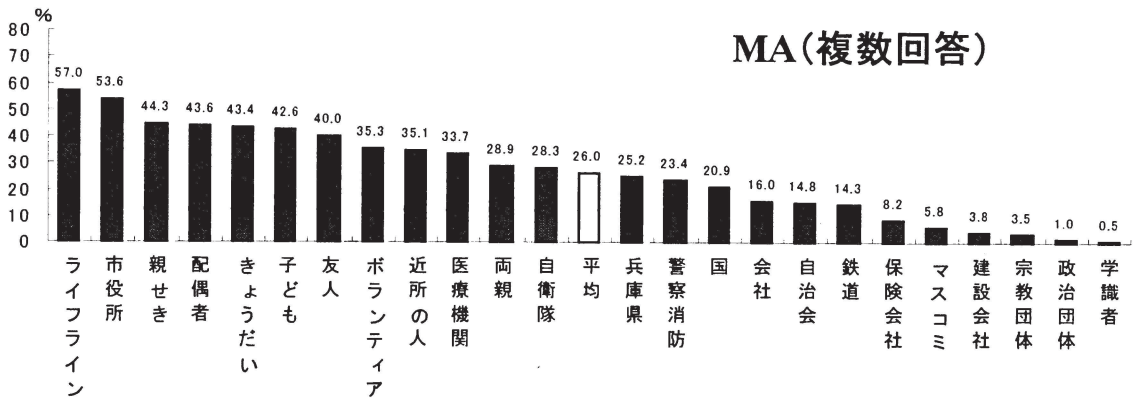


図2：次の災害における物質面での支援者

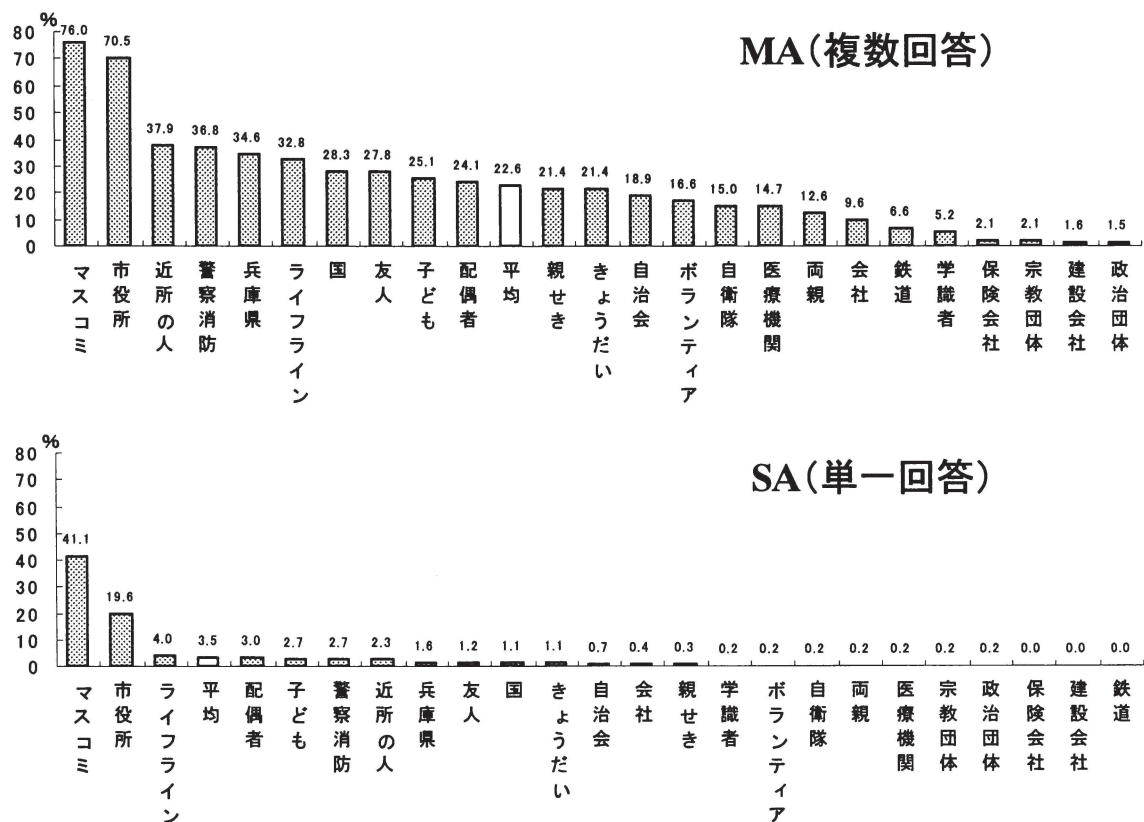


図3：次の災害における情報面での支援者

B. 3つの側面をあわせ見たときの支援者

支持を集めた支援者のほとんどは、物質面で何らかの支援を期待されていた
ライフラインの復旧は、被災者の精神・物質・情報のすべての面を含めた全人的な支援として評価されていた

ここでは、精神面・物質面・情報面をあわせた全人的な支援状況を考えた時に、平均値(期待値)を超えた支持を集めた支援者が、回答者のどの側面で頼りになっているかを明らかにした(図4~5)。図4~5では、円内にいる支援者が平均値(期待値)を超えた支援者であり、3つの円の重なった中にいる支援者は3側面ともに支持を集めた支援者であった。複数回答・単一回答ともに特徴的なのが、支持をあつめた支援者のほとんどが、物質面で何らかの支援を期待されていたことである。複数回答では(図4)、平均値を超えた全16支援者のうち、マスコミ、国、県、警察・消防以外のすべてが物質面での支援を期待され、単一回答では(図5)、平均値を超えた全8支援者のうち、マスコミ以外のすべての支援者が物質面での支援を期待されていた。このことから、期待にこたえて物質面で基盤としての支援を行うことが、その人全体の支援を行うことにつながるということが考えられる。

複数回答では円内にいたのに単一回答で円外へ出たものは、国、県、医療機関、警察・消防、自衛隊、ボランティア、友人、近所の人であった。この結果から考えると、国や県よりも、身近な市役所(単一回答で情報・物質両面で支持された)に公的支援を、より期待していることがわかった。また、友人や近所の人「最も」頼りにする人ではなく、両親・

子ども・配偶者(単一回答では精神・物質両面で支持)や、きょうだい・親せき(単一回答では物質面で支持)などの血縁が最も頼りにされていた。また特徴的であったのは、単一回答でただ1つ円の中心にいたライフライン事業者(ライフライン)の存在である。被災者にとって、ライフラインの復旧は、被災者の精神・物質・情報のすべての面を含めた全人的な支援として評価されていたことが考えられる。

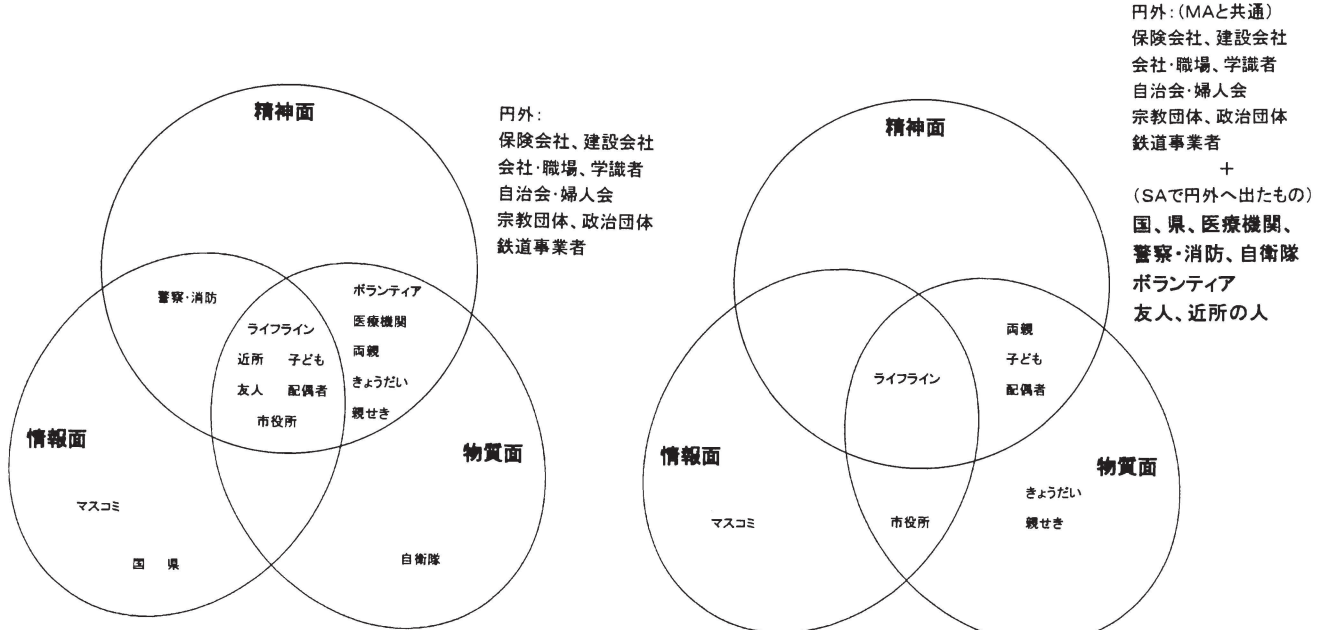


図4：次の災害で頼りになる人・組織(複数回答)

図5：次の災害で最も頼りになる人・組織(単一回答)

注) 精神面・物質面・情報面の各円の中にある支援者が、各側面で平均値(期待値)以上の支持を集めた支援者3つの円が重なった中にある支援者は、3つの側面すべてで支援を期待されている支援者である

C. 世代別でみた支援者

60代以上が期待する支援者は、配偶者・子ども・ライフラインのみである

60代以上は、災害時に配偶者や子ども・親せきが同時に被災した場合、公的機関以外に実際に頼りにできるものがない

20・30代、40・50代、60代以上の各世代によって支援者にどのような違いがあるのかを考察した(図6～7)。複数回答では(図6)、世代を超えて同じ支援者に同じ側面での支援を求めていた。回答者は、個人的・一般的には多くの支援者に支援を期待し、その期待には世代による違いがあまりないことがわかった。

単一回答をみると(図7)、世代やライフステージに関係なく同じ側面で頼りにされている支援者は、物質・情報面での市役所、物質面での親せき、情報面でのマスコミの3つであった。それ以外の支援者については、世代によって違いがみられた。特徴的なのは、60代以上では、支援を期待している支援者が少ないことである。これは言い換えれば、60代以上が実際に持っている人的・組織的資源が少ないために、いざとなった時に頼りにできる支援

者がほとんどいないという事実を表している。60代以上では、配偶者、子ども、ライフラインが全側面での唯一の支援者となっていて、災害時に配偶者や子ども・親せきが同時に被災した場合、公的機関以外に実際に頼りにできるものがないことが考えられる。行政側からみると、この世代に対する公的機関の支援は、被災者の生活再建の成否に大きな意味を持っていることが考えられる。一方、40・50代は多くの支援者を支持しており、特に物質面での資源を多く持っていることが考えられ、この世代は実際に豊かな人的・組織的資源をもっていることがわかった。

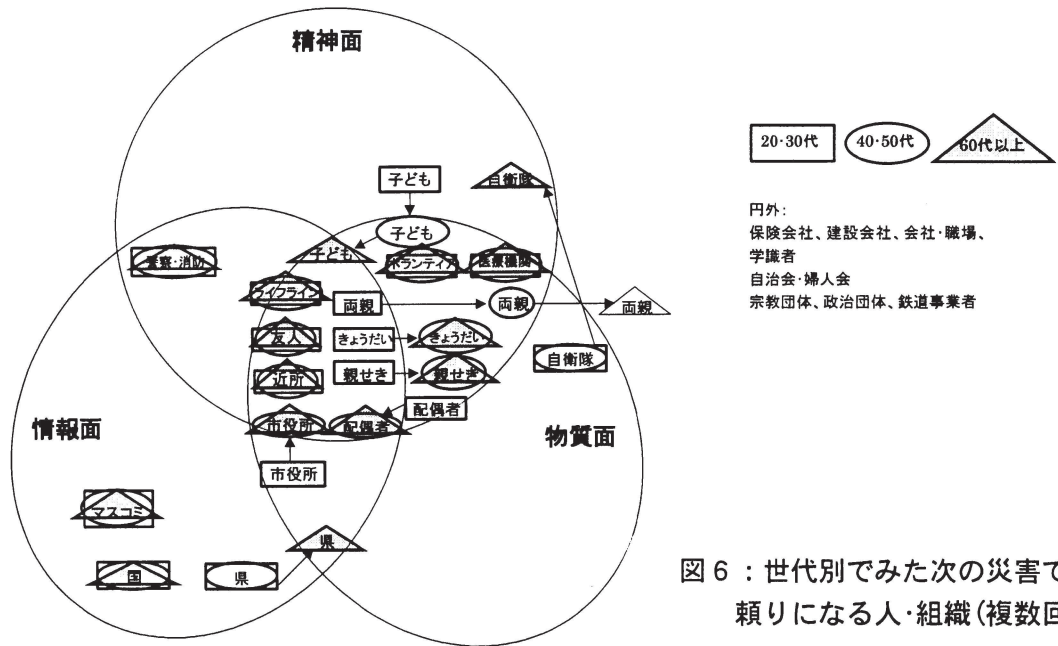


図6：世代別でみた次の災害で頼りになる人・組織(複数回答)

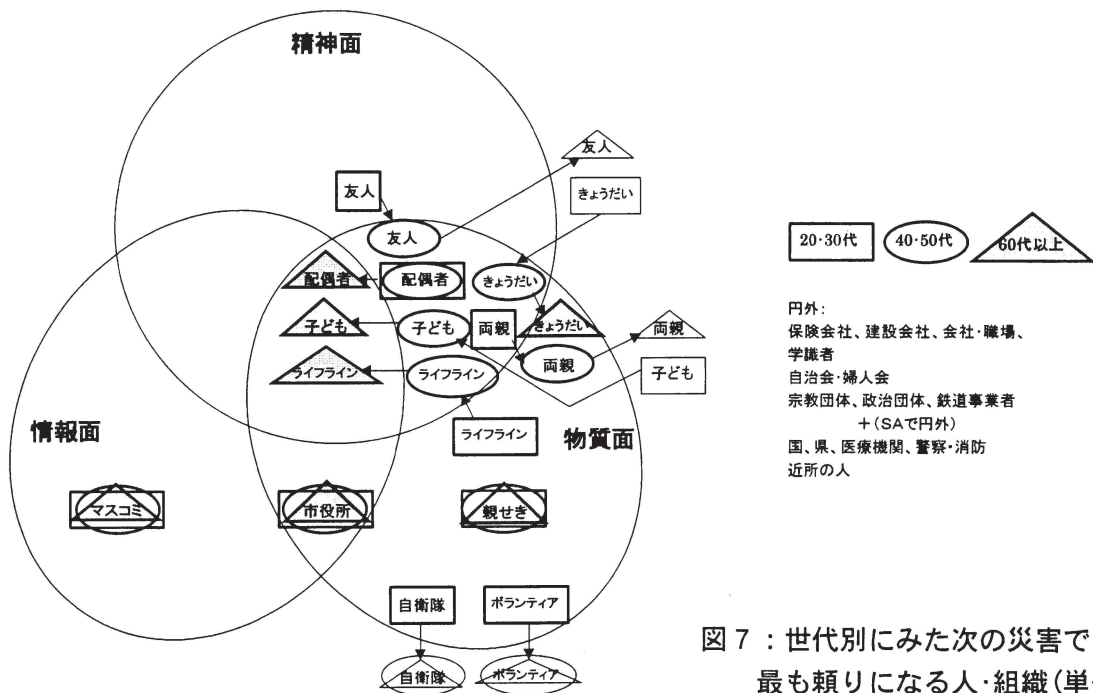


図7：世代別にみた次の災害で最も頼りになる人・組織(単一回答)

注) 精神面・物質面・情報面の各円の中にある支援者が、各側面で平均値(期待値)以上の支持を集めた支援者3つの円が重なった中にある支援者は、3つの側面すべてで支援を期待されている支援者である

D. 世代と性別による支援者のちがい

男性は、公的機関も資源としてとらえている

親せき・子ども・友人は、男女によって頼り方に大きく差が見られる

世代と性別によって支援者にどのような違いがあるのかを考察した(図8~9)。複数回答では、男女ともCで述べた複数回答の傾向と大きな違いはなかった。しかし、単一回答で見た場合、女性が全体の傾向と大きな違いがなかったのに対し(図8)、男性が女性・全体の傾向と大きく違った(図9)。男性は、60代以上が医療機関、警察・消防、市役所、20・30代が国、自衛隊といった公的機関を支援者・資源ととらえていた。「何を自分の支援者・資源とするか」を考えると、性別によって社会のネットワークのとらえかたに違いがあることが1つの理由として考えることができる。また、男性40・50代が物質面での支援者に会社・職場を挙げているのも、女性や男性の他世代には見られない特徴であった。

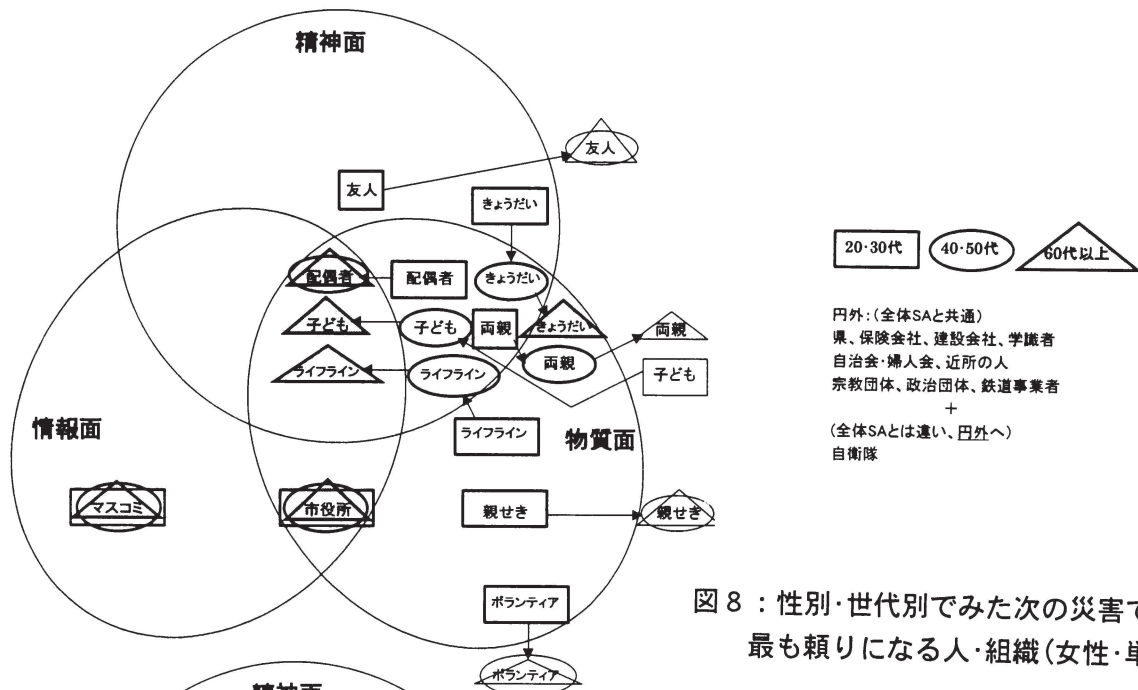


図8：性別・世代別でみた次の災害で最も頼りになる人・組織(女性・単一回答)

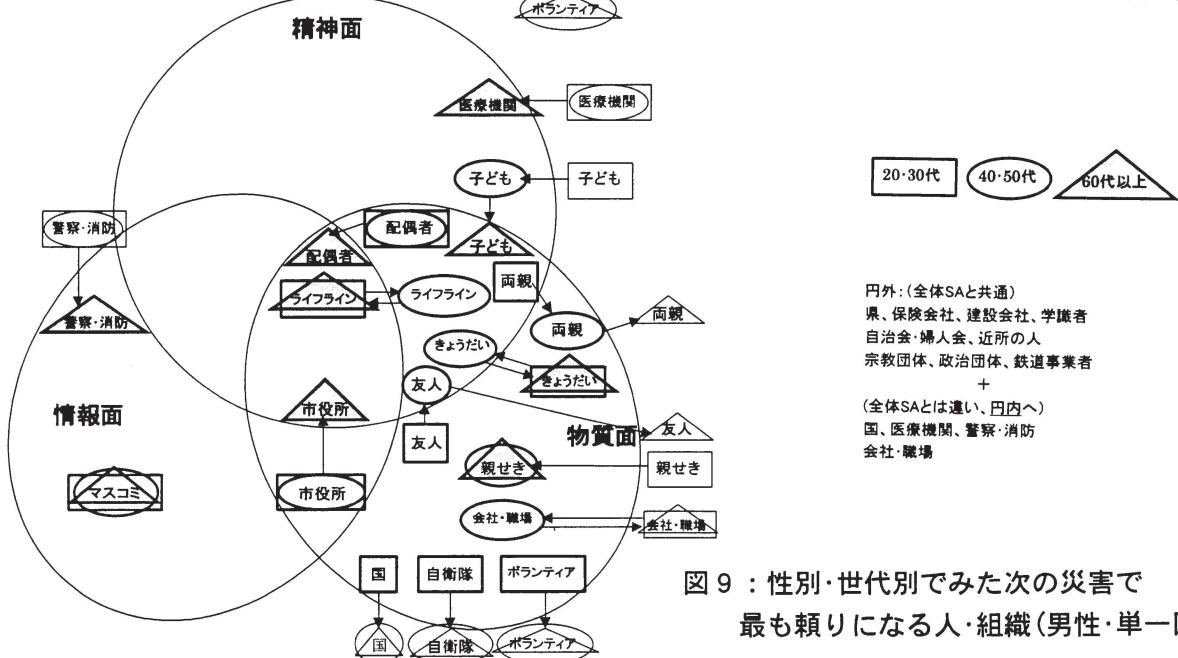


図9：性別・世代別でみた次の災害で最も頼りになる人・組織(男性・単一回答)

世代ごとの男女差で見ると、男女で同じ傾向が見られたのは、配偶者(世代があがると、精神・物質面から3側面で支持)、両親(世代があがると、精神・物質面での支持から物質面からのみの支持になり、60代以上では円外へ)、きょうだい(世代があがると、精神・物質面での支持から物質面からのみの支持へ)であった。一方で、性別によって大きな違いがあったものは、親せき(男性は40・50代から支持されはじめる、女性は20・30代まで支持、その後円外)、子ども(男性は精神面でのみ支持、女性は精神・物質両面で支持)、友人(男性は物質面での支持から40・50代では物質・精神両面で支持、女性は精神面で20・30代まで支持、その後円外)の3支援者は性別によって大きな違いがみられた。

以上をまとめると、支持を求めた支援者のほとんどが、物質面で何らかの支援を期待されていた。このことから、期待にこたえて物質面を基盤としての支援を行うことが、その人全体の支援を行うことにつながるということが考えられる。具体的な支援者について見てみると、基本的には血縁を支援者・資源として頼りにしていることがわかった。公的機関では、国や県よりも身近な市役所に物質的・情報面での公的支援を期待していた。また、ライフラインの復旧は、被災者の精神・物質・情報のすべての面において大きな支援となっていたことがわかった。世代差をみると、60代以上が持っている人的・組織的資源が少ないことが明らかになった。自分の血縁も同時に被災した場合、実際の頼りは公的機関以外にはほとんどなく、60代以上に対する公的機関の支援は、60代以上被災者の生活再建の成否に大きな影響を与えることが考えられる。また、性別で見ると、支援者・組織的資源としての公的機関のとらえかたが男女によって違うことがわかった。